

「木芙蓉」(源氏小鏡・広島大学蔵本)

について(続) — 本文及び引用歌の歌序・本文 —

竹村信治

六. 広大本「木芙蓉」の本文(V)

— 上記以外の内閣文庫本との本文校異 —

前節(前稿「『木芙蓉』(源氏小鏡・広島大学蔵本)の本文について一定家仮名遣と定家仮托とのかかわりなど」古代中世国文学3, 昭和57年8月, 参看)までにおいて, 広島大学国語学国文学研究室蔵本(写本。二冊。図書番号「国文二七七二N」)。以下, 略して広大本とする。尚, 本伝本の翻刻全文は, 平安文学資料稿第二期別巻—広島平安文学研究会, 昭和56年刊—に掲載されている。本稿に示す用例は同書の翻刻文に依り, 「所在(頁・上下段の別・行数, の順に記す)」として同書における所在箇所を示した。「木芙蓉」本文について, その本文の中に見出されるミセケチ・傍書注記(「~歟」)・本文補入箇所・異文注記をとりあげ, 内閣文庫蔵本(写本。二冊。図書番号「和一七七四八」)。以下, 内閣文庫本とする。)との比較結果の主要例を検討しつつ略述した。本節では, 上の四箇所以外に見られる広大本・内閣文庫本間の異同の内, 主要なもののいくつかを類別して示すことにする(所在の左の[]内の数字は, 源氏物語原典からの引用歌番号)。

(I) 傍書の異同

(i)内閣文庫本にあって広大本にない傍書

- 唐人の文つくるなり(「ふみつくる」)傍書(三上4)
- 源氏年也(「七とせ」)(三上5)
- なにかしの院(「あれたるやと」)(七上12)
- こきくれなるの事也(「にひ色」)(九上3)
- 春也(「すまのなか雨」)(四下21)
- ことは(「といふ事なる」)(四下22)
- 父源氏母葵上(「夕霧」)(七上18)

- 兵部卿なり(「三の宮」)(完上22)
- (ロ)広大本にあって内閣文庫本にない傍書
- 箒也(「掃木」)(三下14)
- (ハ)広大本・内閣文庫本間で位置のことなる傍書

- 此とのみ人おもはらひけ也(広大本「とのみ人」, 内閣文庫本「かつらひけ」)(四下5)
- (ニ)傍書本文の字句異同(広大本—内閣文庫本)
- みや所の文也—みやす所の文也(五上14)
- はまをく露の—はにをく露の[傍](六上5)
- いとまさひなり—いとまこひなり(三上9)
- 六条御代所—六条御休所(五下3)

(II) 「木芙蓉」本文の異同

- (イ)広大本にない内閣文庫本本文(「」括弧内)
- 賀茂のいつきにそなはり給ふ「御門供にけんし其比大将にてつかうまつり給ふ」その儀式(二上15)
- わうしきてふのしらへにひきすさみ「給ひてよみ給ひしなり」(有歌—92番—)(四上2)
- (ロ)広大本・内閣文庫本間の字句異同(広大本—内閣文庫本)
- 御心ちまきはしに—御心ちのまきはしに(八下20)
- よる一夜に(三下6)
- 春鶯囀—春の鶯囀(三下11)
- 御心うち—御心のうち(三上16)
- 故院手をとりにて—故院御手をとりにて(五下19)
- 乙女などは—乙女などには(三上9)
- 心かけし—心をかけし(五下19)
- 御子も—御子とも(七下21)
- 五十の賀—五十の御賀(三上6)
- なかりしか—なかりしかは(三上20)
- 横笛—二十二横笛(四上2)
- またれる—またれたる(七下14)

- なけき—思ひ歎き (𠄎下8)
- 後の—母后の (𠄎下2)
- とりへのをくり—とりへのにをくり (𠄎下19)
- ひたちのかみ子—ひたちのかみか子 (𠄎上11)
- 返事も—御返事も (𠄎上18)
- むなしくきから—むなしきから (七上18)
- 玉しゐの—玉しの (𠄎下9)
- 二十六 雲隠—雲隠 (𠄎上10)
- 御ゆするのかたに—御ゆする方に (𠄎上10)
- 母后—女后 (三下4)
- 是に—寔に (三下6)
- 碁こそ—碁こう (五下10)
- 萩—萩 (五下20・21・22)
- さて—とて (六下6)
- しひらたつ物—忍ひくろ物 (六下16)
- ぬえとて有—ぬえとも有 (七上15)
- とりおしたれは—とり出したれは (七下2)
- いぬき—いなき (八上15)
- 三月つこもり—三月つもこり (八下7)
- 是らは—是とは (八下16)
- 此殿にと、め奉りて—此殿もと、め奉りて (三下3)
- ほりそへて—ほりうへて (𠄎下12)
- きかせならはや—きかせ奉らはや (𠄎下6)
- こひ奉りて—とひ奉りて (𠄎上2)
- 我御物から—我御物かと (𠄎下11)
- それことは—そのことは (𠄎上13)
- に木の枝也—小木の枝也 (𠄎下4)
- 院号かうむらせ給ひて—院号かふむらせ給ひて (三上16)
- いみしく—美しく (𠄎上17・𠄎下7)
- みく、み奉る—はく、み奉る (𠄎上20)
- 御年二十三下は—御年二十三には (𠄎下1)
- おちくりいろ—おち葉いろ (𠄎上6)
- ひわり子—雲雀子 (𠄎上15)
- 御服とては—御服はては (𠄎上20)
- やうなり—やうなる (𠄎上2)
- なとむ—うとむ (𠄎上10)
- 御ひけ黒く—御ひけ墨く (𠄎上11)
- 世のしたかふ—世のしたかた (𠄎上12)
- 前齋院と申は—前齋院と申そ (𠄎下4)
- たき物をあはせて—たき物をあはせては (𠄎上8)
- 宣旨かうふりて—宣旨かうむりて (𠄎下9)
- せきせられたり—せさせられたり (𠄎下19)
- とり難思食て—あり難思食て (𠄎下21)
- 心にもいらぬこと—心にもいわぬこと (三上18)
- あへるも—あへるに (三下1)
- とありしをそ—とありしをは (𠄎上16)
- さこそ—さまで (𠄎下14)
- つたへなん—つたへけん [65] (𠄎下1)
- 御かたよりも心さし—御かたよりとひさし (𠄎下7)
- 此世には—此世をは (𠄎下21)
- まきはし給ふ—まきはし給ふ (𠄎上9)
- ふりわけかみ—ふりにけかみ (𠄎上21)
- さて—きて (𠄎下9)
- はいになし奉て—大いになし奉て (𠄎下9)
- みのとしの春に—又のとしの春に (𠄎上19)
- ひらけはしめつ、—ひらけはしのつ、 (𠄎下4)
- 心うらめし—心と、めし [74] (𠄎下7)
- あとは—あらは (𠄎下4)
- 此宮へ—此宮人 (𠄎上5)
- 一るに—つるに (𠄎下3)
- 舟に乗—舟に乗 (𠄎下13)
- 女三の宮—女二の宮 (𠄎下17)
- 霜にあへる—霜にあへす [97] (𠄎上13)
- きくなれは—きくなれと [97] (𠄎上13)
- よきむこに—よきむこと (𠄎下4)
- 木きやうのうち—木ちやうのうち (𠄎上17)
- みとりのふかきをと—みとりのふかさをと (𠄎上1)

以上、上述四項以外の箇所に見出される広大本・内閣文庫本間の主要な本文異同例を記した。それらの異同各例には、書写上の誤読に関わるものもいくつかあり、しかも、その誤写例は一方だけでなく両伝本に用例がわたっている。全般的に見て、内閣文庫本が広大本本文を補う

場合が多いが、広大本が内閣文庫本本文を訂する場合も数例見出される（「いぬき」—内閣文庫本「いなき」、「つこもり」—「つもこり」、「ふりわけかみ」—「ふりにけかみ」、等）。上述の四項で例示した所をも考慮すると、両伝本は、極めて近い関係にあるものと見られ、「木芙蓉」の検討に際しては併わせ用いられるべきものと認められる。

尚、上の一覧中の、源氏物語原典からの引用歌に見出される異同について、付言しておく。65番の場合、広大本本文が源氏物語諸本等に見られるものである。74・97（「霜にあへる」—内閣文庫本「霜にあへず」）番は、ともに内閣文庫本本文が源氏物語諸本等に見られるものである。97（「きくなれは」—「きくなれと」）番は、広大本本文が源氏物語河内本系統の一本、及び小鏡類の古本系本文に見られるもの、内閣文庫本本文が上以外の源氏物語諸本、及び小鏡類の改訂本系に見られるものである。誤写の可能性を考慮に入れる必要はあるが、これも又、前節で述べたところとあわせ、広大本「木芙蓉」と源氏物語本文等との関連を探る上では、重要な材料の一つであるといえよう。

七. 広大本「木芙蓉」と源氏物語原典との関係(I) — 引用歌の歌序 —

広大本「木芙蓉」は、源氏物語原典から引用された歌を百十一首（空蟬巻中の傍書歌「うつせみのはにおく露の」を含めると百十二首。内閣文庫本同。尚、小鏡類の古本系に属する一本である高井家本「源氏小鏡」ではこの傍書歌を本文化している）収載し、その本文も古本系小鏡の特徴を備えている。ここでは、それらの引用歌歌序、及び引用歌の本文について、本節・次節に分ち、一覧を示しておくこととする。

「木芙蓉」に見出される源氏物語原典からの引用歌については、既に、稲賀敬二先生が、所載巻・通し番号・初句を整理し「源氏小鏡百十首本和歌配列一覧」として示されている（『源氏物語の研究』笠間書院、昭和42年9月刊）。平安文学資料稿（上掲）での翻刻文中、源氏物語か

らの引用歌に付した番号は、ここに示された通し番号を踏襲したものである。稲賀先生の作成せられた「和歌配列一覧」をもとにし、本節では、「木芙蓉」収載歌を『源氏物語大成』に所掲の順に配列を改めた一覧として示しておく。

○木芙蓉引用歌歌序一覧

（凡例）

- 一覧は、広大本「木芙蓉」に源氏物語原典から引用された歌の、原典中の所載巻・引用歌番号・広大本「木芙蓉」中の所載巻、の順を以てに示した。
- 広大本「木芙蓉」における源氏物語原典からの引用歌の原典中の所載巻名は、『源氏物語大成』の巻序に即して、一覧最左列に掲げた。「木芙蓉」では、蓬生と関屋、紅梅と竹河において現行一般の源氏物語と逆の巻序をとるが、その旨を枠で囲んで示した。尚、「原典中歌番号」項の番号は、原典所載歌の通し番号による当該歌番号。
- 広大本「木芙蓉」における源氏物語原典からの引用歌の引用歌番号は、これを『源氏物語大成』の当該歌掲載順序に従って巻毎に配列した。広大本「木芙蓉」の当該巻に引用歌が見られない場合は、「原典中所在・巻名」項の直右を空欄にした。又、源氏物語原典と広大本「木芙蓉」とで引用歌の所載巻が異なる場合には、引用歌番号の左に「○」を付してその旨を示した。
- 源氏物語原典からの引用歌の広大本「木芙蓉」における所載巻名は、大略広大本の各巻頭記載に従うこととしたが、仮名を漢字に改めた所もある。
- 利用の便宜のため、各引用歌の、『源氏物語大成』中の所在（頁・行）、上掲平安文学資料稿中の所在、を記した。

源氏物語原典中所在		原典中 歌番号	引用歌 通し番号	「木芙蓉」中所在	
巻名	大成中所在			巻名	所在
桐壺	9・3	1	1	一桐壺	二上22
	13・5	2	2		二下15
帚木	54・9	12	4	二帚木	四下11
	56・14	14	5		四下20
	61・1	17	7		五上11
	61・3	18	6		五上8

空 蟬	78・6	23	3	空 蟬	四上15	若菜上	1054・9	461	56	若菜上	三上3
	94・4	24	8	帚木並空 蟬	六上4		1054・12	462	57		三上6
夕 顔	95・5	25	傍書歌		六上5		1095・14	478	58		三下6
	105・8	27	9	帚木並夕 顔	六下7	若菜下	1183・9	493	59	若菜下	三下21
	118・9	30	10		六下22	柏 木	1228・13	501	60	重柏 木	三上11
	120・14	34	11		七上6		1232・5	502	61		三上14
若 紫	121・2	35	12	三若 紫	七上8		1253・3	504	62		三下11
	179・7	62	14		八下14		1261・2	507	63		三下18
末摘花	180・1	63	13	若紫並末摘花	七下13	横 笛	1277・14	518	64	横 笛	三上15
	206・1	70	16		九下7		1279・8	519	65		三上22
紅葉賀	226・3	80	15	四紅葉賀	九上20	鈴 虫	1297・8	522	66	横笛並鈴 虫	三下20
	238・8	84	17		三上6	夕 霧	1314・7	526	67	重夕 霧	三上5
花 宴	238・10	85	18	五花 宴	三上9	御 法	1385・9	555	72	重御 法	三上10
葵	291・1	110	19	六 葵	二下14		1389・7	556	68		三上16
	291・3	111	20		二下17		1396・9	560	69		三下13
榊	336・4	133	21	七 榊	三上15		1396・10	561	70		三下18
花散里	389・11	168	22	八花散里	三下22		1397・10	562	71		三上3
須 磨	403・14	172	23	九須 磨	三上20	幻	1403・6	564	75	重 幻	三下10
	404・2	173	24		三下1		1410・2	568	74		三下6
	428・7	208	25		三下18		1415・11	573	77		三上4
明 石	441・14	218	○ 26		三下12		1417・12	575	76		三下16
	464・2	228	27	十明 石	三下15		1419・2	579	78		三上11
	466・14	231	29		三上16		1419・7	580	79		三上16
滯 標	474・3	242	28		三上2		1420・1	583	73		三上17
	502・12	260	31	三滯 標	三下21	雲 隠	1422・2	586	80		三下9
	503・2	261	30		三上22		1422・13	587	81		三上4
蓬 生	536・2	268	34	滯標並蓬 生	三下16	句兵部卿				美雲 隠	
関 屋	548・10	271	33	滯標並関 屋	三上18					重 薰中将 句兵部卿	
	549・8	272	32		三上15	紅 梅	1454・1	591	83	薰並紅 梅	三上17
繪 合	587・9	288	35	三繪 合	三上11	竹 河	1473・11	599	82	薰並竹 川	三下10
松 風	618・8	305	36	三松 風	三下8						
薄 雲	644・1	311	37	三薄 雲	三上22	橋 姫	1520・12	625	85	三橋 姫	三上8
朝 顔	698・2	329	38	三朝 顔	三下19		1530・11	628	84		三下5
乙 女	711・10	336	39	三乙 女	三下21	椎 本	1577・4	648	86	三椎か本	三上5
玉 鬘	751・7	349	41	三玉 鬘	三上9	総 角	1588・1	653	87	三総 角	三下9
初 音	764・8	352	43	玉鬘並初 音	三上19		1588・3	654	88		三下14
	765・3	354	42		三上12	早 蕨	1678・5	685	89	四早 蕨	三下20
胡 蝶	786・7	364	○ 40	玉鬘並小 蝶	三上5	宿 木	1705・3	699	96	五宿 木	三上10
	789・13	366	○ 52	三乙 女	三上17		1705・5	700	97		三上13
螢	809・11	373	44	玉鬘並檣 柱	三上11	東 屋	1716・5	702	94		三上17
常 夏	836・7	380	45	玉鬘並螢	三上13		1722・12	705	91		三下10
篝 火	856・12	384	46	玉鬘並常 夏	三上21	浮 舟	1764・7	714	90		三上12
野 分	873・7	386	48	玉鬘並篝 火	三上1		1766・2	716	92		三上3
	877・12	389	47	玉鬘並暴 風	三下14		1766・7	717	93		三上6
行 幸				玉鬘並御 幸		東 屋	1818・14	723	○ 95		三下14
藤 袴	920・10	399	49	玉鬘並藤 袴	三上13		1845・11	730	98	六四 阿	三上21
	920・13	400	50		三下5		1881・5	737	100	七浮 舟	三下9
真木柱	951・14	412	51	玉鬘並檣 柱	三下13		1881・7	738	101		三下12
梅 枝	977・6	428	53	三梅か枝	三下10		1888・7	739	104		三下12
	981・9	435	54		三下21		1892・6	741	102		三上2
	981・11	436	55		三上2		1892・8	742	99		三下18
藤裏葉				三藤裏葉							

	1894・11	743	103		咒上18
	1911・3	750	105		咒下21
蜻蛉 手習	1984・4	766	106	八蜻蛉	咒下14
	2005・5	767	107	九手習	吾下1
	2005・9	768	109		吾下12
	2022・2	779	108		吾下4
	2041・14	792	110		吾下20
夢浮橋	2068・11	795	111	十夢浮橋	吾上15

この一覧によって、広大本「木芙蓉」（内閣文庫本、同）における巻序・並びの巻の認定のあり方、又、その叙述の特徴等を窺うことができよう。

古本系小鏡（百十首本系統）の叙法の特徴に関しては、既に稲賀先生に御指摘がある（前掲書）。即ち、その叙法は、巻名の由來說明、巻内容の事件単位での梗概化、源氏寄合の説明、を中心とするが、事件と事件との照応、筋・構想のかかわりあいにより重きを置いた梗概化により多くの関心を示したことを窺わせるものとなっているのである。この間の事情は、上の一覧中、一卷内の歌の配列順序が源氏物語原典と「木芙蓉」とで相違している所、源氏物語原典で別の巻に収載されている歌を「木芙蓉」が配列を改めて引用している所などから、容易に理解することができる。

ところで、広大本「木芙蓉」には、源氏物語原典から引用された上述の百十一首のほかに、「本歌」として指摘された歌が、傍書例を含めて四首見出される（内閣文庫本、同）。即ち、

- 侘ぬれは今はたおなしにはなるみをつくしてもあはんとそ思ふ（後撰、恋五）〈滯標巻〉（七下16）
- 朝日さすふちのうらはのうらとけて君しおもは、我もたのまん（後撰、春下。初句「春日さす」）〈藤裏葉巻〉（元上21）
- 夕闇はみちたとたとし月まちてかへれわかせこそそのまにもみん（古今六帖、一、夕やみ）〈若菜下巻〉（三下10）
- 咲桜さくらの山の桜花さく桜あればちるさくらあり（古歌—伊行源氏所引。初句「さくらさく」—）〈幻巻・傍書歌〉（三下2）

である。それぞれの引歌の諸古注釈書における

所収巻を見ると、「侘ぬれは」歌は滯標巻・藤袴巻・若菜下巻、「春日さす」歌は藤裏葉巻、「夕やみは」歌は空蟬巻・若菜下巻、「桜咲」歌は竹河巻・椎本巻、に見出される（伊井春樹氏編『源氏物語引歌索引』、笠間書院、昭和52年9月刊、による）。諸注は同一引歌を別の巻にも指摘しており、「木芙蓉」の場合と全てにわたり一致する古注は見当たらないが、中で、「春日さす」歌の初句を花屋抄が「木芙蓉」と同じく「朝日さす」としているのが注目される。

引歌の引用巻が諸注と異なるのは、「木芙蓉」で傍書注記の形で引かれる「桜咲」歌である。「木芙蓉」では幻巻に見られるが、諸注は竹河巻・椎本巻（第四・結句を「ちる桜あれば咲く桜あり」とする場合が多い。）に指摘している。この古歌の引かれる源氏物語本文の叙述は、竹河巻の

三月になりて、咲く桜あれば散りかひくもり、
大方の盛なる頃、
椎本巻の

はるばるとかすみわたれる空に、散る桜あれば、今は開けそむるなど、色々見わたさるゝに、

である。一方、「木芙蓉」が本歌を引く幻巻における源氏物語本文の叙述は、

外の花は一重散りて、八重咲く花桜さかり過ぎて、樺桜はひらけ、藤は後れて色づきなどこそすめるを、その遅く疾き花の心をよくわきて、いろいろをつくし植ゑおき給ひしかば、である。この幻巻の叙述について、諸注は次の三種の引歌を指摘する。

○見る人もなき山里の桜花ほかのちりなむのちぞさかまし（古今、春上）〈休閒抄、紹巴抄〉

○浅緑野べのかすみはつゝめどもこぼれて匂ふはなざくらかな（拾遺、春）〈河海抄一結句「かば桜かな」—、孟津抄一第二句「春のけしきは」〉

○雨ふれば色さりやすき花桜薄き心を我が思はなくに（貫之集）〈源氏物語新釈〉

このようにして、竹河巻・椎本巻の源氏物語本文の叙述に近似する幻巻の叙述に対する引歌は、

その場面から見て諸注の指摘が適当であるように思われる。では、「木芙蓉」はなぜここに「桜咲」歌を引用したか。そこには次の如き事情を窺うことができる。

幻卷の上の叙述を梗概化した小鏡類の叙述は、古本系・改訂本系で若干の異同があるものの、大略、

花桜咲みだれて散桜あればさく桜さくらの山
もと見わたされていかにあはれのあさからん
と同じいものとなっている。それは、ここに指摘された「桜咲」歌を用いたものとなっているのである。即ち、小鏡は、その成立の当初より、上の源氏物語幻卷の本文叙述を、諸注が竹河卷・椎本卷の本文叙述の本歌として指摘する古歌を以って梗概化していたと見るべく、「木芙蓉」の傍書歌は、この「木芙蓉」本文叙述に対し、或いは、「木芙蓉」本文叙述に導かれて源氏物語幻卷本文叙述に対し、「本歌」を指摘したものと考えられる。諸注に引用が見られないので可能性は少ないが、或いは、これらは、幻卷の上の叙述に「桜咲」歌を注するような注釈の場から、小鏡の叙述が生まれたことを教えているのかも知れない。

さて、広大本・内閣文庫本の「木芙蓉」に見出されるこの傍書歌は、小鏡類では高井家本「源氏小鏡」（武田孝氏編『源氏小鏡—高井家本—』教育出版センター、昭和53年4月刊）に見られる。ここでは、「さくらさく」歌は、改行されてはいないものの、梗概説明の文脈の乱れを無視して本文化されている。即ち、

花さくらさきみたれてちるさくらあればさく
さくらさくらの山もと見わたされて本歌にさ
くらさくさくらの山のさくら花さくさくらあ
ればちるさくらありあはれのあさからん
とあるので。上述の如き事情で傍書されたと考えられる「本歌」がこのような形で本文化されている事実は、本節冒頭にふれた空蟬卷中の源氏物語原典からの引用歌の傍書を高井家本が本文化している点とあわせ、「木芙蓉」と高井家本「源氏小鏡」との関係、源語注釈における本歌指摘の成立のあり方、等を考える上で注目されるものと思われる。

八. 広大本「木芙蓉」と源氏物語原典との関係(II) —引用歌の本文—

源氏小鏡の諸本中、古本系伝本と改訂本系伝本とを区別する基準の一つとして、伊井春樹氏は、それぞれの系統の小鏡が依拠した源氏物語原典の本文の相違をあげておられる。ここでは、古本系小鏡は別本系の源氏物語本文によって梗概化され、改訂本系小鏡は青表紙本系の源氏物語本文によって古本系小鏡を改訂したものであることが、明らかにされている。この間の検討は、小鏡に引用された源氏物語所載歌の本文比較をとおして行なわれた（同氏「源氏小鏡伝本考—古本系から改訂本系へ—」国語と国文学、昭和42年9月、『源氏物語注釈史の研究』—桜楓社、昭和55年11月刊—所収。が、ここでは、この御考察を参考にして、「木芙蓉」に見出される源氏物語原典からの引用歌について、源氏物語諸本・古本系小鏡（百十首本）、改訂本系小鏡（百三十首本）等との比較結果を一覧として示しておくことにする。尚、検討の便宜上、引用歌の内、青表紙本を底本とする『源氏物語大成』の本文と相違する箇所を、対象を限定した。

○「木芙蓉」引用歌本文異文一覧

（凡例）

- 一覧は、引用歌番号・異文箇所(句)・『源氏物語大成』本文・広大本「木芙蓉」本文・広大本「木芙蓉」本文に一致する源氏物語伝本・広大本「木芙蓉」本文に一致する源氏物語歌本文を収載している参考資料・古本系小鏡本文(A・B)・改訂本系小鏡本文の順を以って示した。
- 『源氏物語大成』本文・広大本「木芙蓉」本文の間の異文箇所には、傍線を施してこれを示した。尚、広大本「木芙蓉」と内閣文庫本「木芙蓉」との引用歌に関する主要な本文異同は、三節(48番「萩のは過る」)・五節(77番「よるへの波に」、52番「いはもるし水の」)・六節(65番「つたへなん」、74番「心うらめし」、97番「霜にあへる」・「きくなれば」)で略述したので、今措く。

- 広大本「木芙蓉」本文に一致する源氏物語伝本は、『源氏物語大成』での略号を用いてこれを示した。」
- 広大本「木芙蓉」本文に一致する源氏物語伝本が見出されない用例について、それが「木芙蓉」成立当時の源氏物語流布本文に依拠したものである可能性を検討するために、源氏物語歌を収載する資料との比較を試み、一致する本文を有する資料名を略号で示した。対象とした資料は、無名草子(略号, 草。岩波文庫本による)・物語百番歌合(物。『物語和歌総覧』による)・拾遺百番歌合(拾。同上書による)・源氏物語歌合(源。同上書による)・風葉和歌集(風。『校本風葉和歌集』による)・源氏物語提要(提。『今川範政源氏物語提要』による)である。一覧の煩を避けて、ここでは一々提示しなかったが、梗概書に引かれた源氏物語和歌の本文については、稲賀先生が既に検討を加えておられる(「源氏物語梗概書にあらわれた中世の流布本研究―源氏物語和歌異文一覧1―」広島大学文学部紀要, 昭和40年3月)。小鏡類もその検討の対象に加えておられるので、参着いただきたい。
- 古本系小鏡の本文との比較には、A紅梅文庫旧蔵、広島大学国語学国文学研究室蔵「源氏小鏡」(一冊。慶長頃写。図書番号「国文二七九三N」)、B高井完勝氏蔵「源氏小鏡」(武田孝氏編, 上掲書による。)の二種を用い、当該異文箇所には傍線を施して示した。それぞれ、広大本「木芙蓉」の本

文と一致する場合には引用本文の冒頭に「○」を付し、『源氏物語大成』底本文と一致する場合は引用本文の冒頭を空欄にした。又、いずれとも一致しない場合には「△」を付した。尚、Aの紅梅文庫旧蔵本は、源氏物語原典からの引用歌百八首を備え(14・45・50番を欠く)、伊井氏の分類では古本系第一種に認定されているものである。Bの高井家本についての詳細は武田氏の解説にゆづるが、源氏物語原典からの引用歌は百九首をかぞえ(14・45・50番を欠く)、又、下の一覧に見る如く、広大本「木芙蓉」の引用歌本文と一致する場合が多い。更に、「山路の露」の名称の見られる「木芙蓉」跋文とはほぼ同文の跋文を収載している点、「木芙蓉」の傍書歌(空蟬巻中の引用歌・幻巻中「本歌」)を本文化して引いている点(前節参照。尚、高井家本は「木芙蓉」中の四首の「本歌」をすべて収載している。)など、「木芙蓉」との関連を窺わせる材料もいくつか見うけられる。冒頭に「目録」等を備え、源氏寄合にも少し差異があるが、参考としてここに比較の対象とした。

- 改訂本系小鏡との比較には、広島大学国語学国文学研究室蔵「源氏小鏡」(無刊記草本, 一面十一行。図書番号「国文三六一八N」)を用い、当該箇所を古本系小鏡の場合と同様に示した。本伝本を含む改訂本系(百三十首本系)小鏡については稲賀先生の上掲書に詳しいので、今は措く。

番号	句	『大成』本文	「木芙蓉」本文	源氏諸本との一致	参 考	古本系小鏡A	古本系小鏡B	改訂本系小鏡
3	初	かすならぬ	そのはらや			○そのはらや	○そのはらや	かすならぬ
4	二	月もえならぬ	きくもえならぬ	青一秀, 河		○きくもえならぬ	○きくもえならぬ	月もえならぬ
5	三	おりおりに	おりおりは		提	おりおりに	○おりおりは	おりおりに
	四	あはれはかけよ	あはれをかけよ		風(原), 提	あはれはかけよ	○あはれをかけよ	あはれはかけよ
7	結	いふかあやなき	いふかあやなき	別一国	提	△いふかはかなき	△いふそわりなき	いふかあやなき
9	四	ほのほのみつる	ほのほのみゆる			○ほのほのみゆる	○ほのほのみゆる	ほのほのみつる
10	結	ちきりたかふな	ちきりたえすな	河, 別一陽		ちきりたかふな	○ちきりたえすな	ちきりたかふな
16	三	いてつれと	いてしかと			○いてしかと	○いてしかと	いてつれと
19	四	おひゆく末は	おひゆく末を	青一横		○おひゆく末を	○おひゆくすゑを	おひゆくすゑは
20	二	いかてかしらむ	いかてさためん			○いかて寤ん	○いかにさためん	いかてかしらん

三	さためなく	はかりなく	河一宮	○はかりなく	○はかりなく	さためなく
四	みちひるしほの	みちくるしほの	河一宮	○みちくるしほの	○みちくるしほの	みちひるしほの
23 二	さすらへぬとも	さすらひぬとも	提	さすらへぬとも	○さすらひぬとも	さすらへぬとも
24 二	かけたにとまる	影さへとまる	河一七	かけたにとまる	かけたにとまる	かけたにとまる
28 二	春のなげきに	春のなごりに	河一七	○春のなごりに	○はるのなごりに	春のなげきに
29 四	みるめはあまの	みるめはうらの	草	みるめはあまの	みるめはあまの	みるめはあまの
結	すさひなれとも	すさみなれとも	草	すさひなれとも	すさひなれとも	すさひなれとも
32 初	わくらはに	たまさかに	青一横氏陽池三	わくらはに	わくらはに	わくらはに
35 三	山ざとに	故郷に	河一御保冷大	○故郷に	○ふるざとに	○古ざとに
36 二	みねにたなひく	みねにたたよふ	河一保	○峯にたたよふ	○みねにたたよふ	みねにたなひく
四	ものおもふ袖に	ものおもふ袖の	河一保	○もの思そての	○物おもふ袖の	物おもふ袖に
結	いろやまかへる	いろにまかへる	河、別一讚陽保	△色そまかへる	○いろにまかへる	色やまかへる
38 二	神さひぬらし	神さひぬらん	提	○神さひぬらん	○かみさひぬらん	神さひぬらし
四	ふるき世のとも	ふるき世のこと	河、別一讚陽保	ふるきよの友	ふるき世のとも	ふるきよのとも
39 結	つてにたにみよ	つてにてもみよ	風	○つてにてもみよ	○つてにてもみよ	つてにたにみよ
40 三	したくさに	下草の	提	○下草の	○したくさの	した草に
41 二	身はそれなれと	身はそれならて	提	△身はそれなから	○身はそれならて	身はそれなれと
結	たつねきつらむ	たつねきぬらん	青一慈横、河、別	○尋きぬらん	○たつねきぬらん	たつねきつらん
43 四	よにたくひなき	世にくもりなき	風(「にも」)	○代にくもりなき	○世にくもりなき	よにたくひなき
44 四	いふよりまさる	いふにはまさる	提	△いふにもまさる	△いふにもまさる	いふよりまさる
結	おもひなるらめ	おもひなりけれ	別一阿	○思ひなりけれ	○おもひなりけれ	おもひなるらめ
46 四	よにはたえせぬ	身よりあまれる	草、源、風、提	よにはたえせぬ	○みよりあまれる	よにはたえせぬ
結	ほのをなりけれ	思ひなりけれ	青一御三、河一七、大、別一麦阿	○思ひなりけれ	○おもひなりけれ	ほのをなりけれ
47 二	むら雲まかふ	村雲まよふ	青一御身	○むらくもまよふ	○むら雲まよふ	○むら雲まよふ
48 四	うき身ひとつに	我身ひとつに	別一阿	うき身ひとつに	○わが身ひとつに	○わが身ひとつに
51 四	まきのはしらは	真木の柱よ	河一御、別一陽	まきのはしらは	ま木の柱は	○まきのはしらは
52 四	いはもる水に	いはもるし水の	源、風、提	○いはもる水の	○岩もる水の	○いはもる水の
58 初	ひかりいてん	たちいてん	提	ひかりいてん	ひかり出ん	ひかりいてん
結	夢かたりする	物かたりする	提	夢かたりする	夢かたりする	夢かたりする
60 三	むすほ、れ	むすほれて	別一阿	むすほ、れ	むすほ、れ	むすほ、れ
結	猶やのこらむ	名をやのこさん	別一阿	○名をや残さん	○名をやのこさん	なをやのこらん
61 四	思みたる、	思ひこかる、	別一國	思ひみたる、	おもひみたる、	おもひみたる、
62 二	たねはまきしと	たねをまきしと	提	たねはまきしと	○たねをまきしと	たねはまきしと
65 三	ことならは	ことなから	提	ことならは	ことならは	ことならは
66 三	しりにしを	みしかとも	提	○みしかとも	○みしかとも	しりにしを
67 四	たちいてん空も	たちいてんかたも	提	たちいてんそらも	○立出んかた	たち出んそらも
70 初	露けきは	露けきは	提	露けきは	露けきは	露けきは
二	むかしいまでも	昔も今も	青一三	○むかしも今も	○むかしもいまでも	むかしいまでも
三	おもほえす	おほ、えす	提	おもほえす	おもほえす	おもほえす
73 結	ゆくゑたつねよ	行ゑせらせよ	提	○ゆくゑしらせよ	○ゆくゑしらせよ	ゆくゑたつねよ
74 四	心とめし	心うらめし	提	心と、めし	こ、ろと、めし	こころと、めし
75 結	たつねきつらん	尋きぬらん	提	○たつねきぬらん	○たつねきぬらん	たつねきつらん
76 二	しのふるよひの	しのふるよるの	提	○しのふるよるの	しのふるよひの	しのふるよひの
77 二	よるへの水に	よるへの波に	草、提	よるへの水も	○よるへのなみに	よるへの水に
78 二	あふせは雲の	あふ瀬を雲の	草、提	○あふせを雲の	○あふせを雲の	あふせは雲の
80 二	みるもかなし	みるもかなしき	河一為、別一御	○みるもかなしき	○みるもかなしき	みるもかなし
結	煙とをなれ	けふりともなれ	陽麦阿	○けふりともなれ	○けふりともなれ	けふりとをなれ
81 結	けふかさしてん	けふかさしてん	別	けふかさしてん	けふかさしてん	けふかさしてん
82 結	そこはしりきや	ほとはくみきや	河一鳳	○程はくみきや	○ほとはくみきや	そこはしりきや
結	そこはしりきや	ほとはくみきや	別一西保国	○程はくみきや	○ほとはくみきや	そこはしりきや
83 結	とはすやあるべき	とはすやはある	別一麦	○とはすやある	○とはすやはある	とはすやあるべき
結	とはすやあるべき	とはすやはある	別一麦	○とはすやある	○とはすやはある	とはすやあるべき

84	二	心をくみて	心をしらて	別一宮国		心をくみて	こ、ろをくみて	こ、ろをくみて
	結	袖そぬれぬる	袖そぬれける			○袖そぬれける	○袖そぬれける	袖そぬれぬる
86	四	むなしきとこに	むなしき床と			むなしき床に	○むなしきとこと	むなしきとこに
87	三	むすひこめ	むすひつ、			○むすひつ、	○むすひつ、	むすひこめ
	四	おなしとこに	おなし心に	青一御、河、別	提(傍)	○おなし心に	○おなしこ、ろに	おなし所に
88	結	いか、むすはん	いかてむすはん			○いかてむすはん	○いかてむすはん	いか、むすはん
90	二	思ひいてすは	思ひしらすは			○おもひしらすは	△おもひすてすは	おもひ出すは
95	三	身にそへて	身にかへて			○身にかへて	○身にかへて	身にそへて
96	二	かき根ににほふ	かきねにさける	河、別一陽保阿	提	○かきねにさける	○かきねにさける	○かきねにさける
	三	花ならば	菊ならば			花ならば	花ならば	花ならば
97	初	霜にあへす	霜にあへる			霜にあらす	霜にあへす	霜にあへす
	三	菊なれと	菊ならば	河一七		○きくなれば	○きくなれば	きくなれと
	結	あせすもある哉	あせすそありける			○あせすそ有ける	○あせすありける	あせすもあるかな
98	四	あまりほとふる	うたてもか、る			あまり程ふる	○うたてもか、る	あまりほとふる
102	四	こしまのさきに	こしまかさきに	青一横平、河一	提	○こしまかさきに	○こしまかさきに	こしまのさきに
103	四	君にそまとふ	君にそまよふ	御、別一國桃		○君にそまよふ	○きかりもまよふ	(な し)
	結	みちはまとはす	道はまよはす	青一榊、河一御	風	○道はまよはす	こちまとはす	
104	三	くちせしを	たえせしを	別一陽斐		○たえせしを	○たえせしを	くちせしを
105	二	ころともしらす	ころともしらて	別一宮陽國		比ともしらす	○ころともしらて	ころともしらす
106	三	みれは又	はかなくて	別一宮陽國	草、源ア	○はかなくも	○はかなくて	見れは又
107	三	はやきせを	はやきせに	別一池桃	風、提	○はやき瀬に	○はやきせに	はやきせを
108	結	露そみたる、	露そこほる、	青一二	風、源ア	○露そこほる、	○露そこほる、	露そみたる、
110	二	人こそみえね	人こそなけれ			○人こそなけれ	○人こそなけれ	人こそ見えね
111	結	ふみまとふかな	ふみまよふかな	河一七	提	○ふみまよふかな	○ふみまよふかな	ふみまとふかな

※ 「源氏諸本との一致」項の内、4青一秀は「月(さく)」、47青一御は「まよ(か)ふ」、48青一御身は「わか(うき)」であり、19青一横は「すゑを(は)」、47青一三「まか(よ)ふ」、103青一榊は「まよ(と)はて(す)」とある(校異の示し方は、『源氏物語大成』による)。

又、「参考」項の内、5「風(京)」は京都大学本文との一致を示し、87「提(傍)」は源氏物語提要の傍書に一致することを示す。源氏物語歌合のA・イは『物語和歌総覧』での二系統(A=源氏物語歌合、底本一宮内庁書陵部蔵本、校合本一源氏物語歌合絵詞書<森暢氏著『歌合絵の研究』所収)、イ=五十四番歌合、底本一宮内庁書陵部蔵本)をさし、一覧中でA・イの別を示していない場合は両本に見られることを意味する。尚、52及び105・108「源ア」は、A系統本の校合本に広大本「木芙蓉」と一致する本文が見出される。

上の一覧では、61・81番の、小鏡類の古本系・改訂本系本文、及び青表紙本系統本文と相違する異文が、それぞれ別本系・河内本系の源氏物語本文の一本と一致している点や、29番(結句)の、源氏物語諸本・小鏡類と相違する異文が、無名草子における引用歌本文に一致する点や、7番の、小鏡類・青表紙本系統本文と相違する異文が、別本系統源氏物語本文、及び源氏物語提要における引用歌本文に一致している点、などが注目される。それらは、他の、青表紙本系統源氏物語本文と相違する広大本「木芙蓉」本文が別本系統源氏物語本文や源氏物語歌を引用している参考資料の引用歌本文と一致する場合(44番結句、52番、60番結句、80番結句、105番、107番、等)をあわせ考えるならば、広大本

「木芙蓉」に見える源氏物語からの引用歌本文の多くが、誤写でなく、成立当時流布していた別本系統源氏物語本文を承けたものであることを推察させる。

上の一覧において注目すべき今一つの点は、『源氏物語大成』が底本に用いた青表紙本系統源氏物語本文と相違する広大本「木芙蓉」の引用歌本文がほとんど改訂本系小鏡のそれに一致せず、又、その改訂本系における広大本との不一致例のすべてが青表紙本系統の源氏物語本文と一致していることである。そして更に、古本系小鏡の一伝本である紅梅文庫旧蔵本(一覧中「古本系小鏡A」との比較によれば、62・105等に見るごとく、別本系統の源氏物語本文や参考資料に一致例の見出される広大本「木芙蓉」

の引用歌異文のいくつかが紅梅文庫旧蔵本の本文と一致せず、むしろ紅梅文庫旧蔵本の本文は改訂本系小鏡の引用歌本文と一致している場合がみうけられる点も興味深い。これらは、改訂本系小鏡が青表紙本系統源氏物語本文によって古本系小鏡を改訂したものとする上述の伊井氏説に符合するだけでなく、本「木芙蓉」が別本系統の源氏物語本文によって梗概化を行なった古本系小鏡類のより古い姿を伝えるものであることをも推測させるように思われる。

ところで、一覧に示した広大本「木芙蓉」中の引用歌異文は、そのほとんどが内閣文庫本と一致するものであるが、上述の通り、中にいくつかの不一致例がある。それらは、広大本の異文注記例などから見て、広大本書写者の源氏物語本文を介しての校訂営為と何らかの関連をもつもののようにも思われる。明確な判断は下し難いが、「木芙蓉」と源氏物語本文との関係を考える際には、祖本「木芙蓉」と本伝本とを区別して検討を進めることが必要であろう。

九. おわりに

さて、数多くの異称をもち、それ故に流布の広範さを推測させる小鏡類が、別本系統の源氏物語本文に基いて成立し、青表紙本系統の源氏物語本文による改訂営為を経て成長したことは、小論においても、再三にわたり確認してきたところである。その改訂営為は、主として、中世諸文化に浸透する定家尊崇の風潮に連なった連歌師達の手でなされたものであろうが、小鏡類成立時の姿を教える古本系が、青表紙本系統・河内本系統の源氏物語本文ではなく、別本系統の本文に依ったと考えられる様相を示していることは、やはり興味深い問題だといわなくてはならない。前節一覧の「参考資料」項に用いた諸作品の場合でも同じだが、これらの源氏物語享受史の中で登場する作品は、別本系統に属する源氏物語本文を引く場合がいくらか見うけられる。別本系統とは、衆知のとおり、青表紙本・河内本のいずれの系統にも分類できない伝本を総称しての謂である。その時代における源氏物語自体の本文の揺れも考える必要はあるが、そ

れらは、正統の源氏学の家門以外の場で用いられた源氏物語の姿を窺わせるものといってもよいだろう。つまり、小鏡類や上述諸作品は、正統の源氏学とは別の場で、当初成立したと見られるのである。小鏡は源氏寄合を収載する。正統の源氏学とは別の場は即ち連歌の場ということになろう。連歌は文芸としての地位を確立する中で定家尊重の傾向を強くしてゆく。連歌師達のハンド・ブックとして用いられた小鏡が、伝写の度毎、その中味に定家尊崇の影を刻してゆくのは、蓋し当然である。小鏡類の成長が定家整定の青表紙本系統の源氏物語本文による改訂営為を以って展開したのは、そのあらわれとみてよい。

ところで、小論は、前稿・本稿において、広大本「木芙蓉」についての解説を記してきたが、この略述の視点を広大本「木芙蓉」書写者の校訂営為においた。その校訂営為とは、源氏物語の本文・内容に即した「木芙蓉」本文の叙述改訂、奥書記載との照応を企図したかと考えられる「定家仮名遣」への仮名遣の改訂、の二点として要約できるものであった。これがいかなる源氏物語本文に依拠するものであったか尚吟味を必要とするが、校訂営為そのものの意味は、定家尊重を背景とする学問的姿勢の方向をもつものとして考えられてよいように思われる。小鏡類の古本系から改訂本系への成長は、上述のとおり、連歌史における定家尊重の流れをうけたもので、引用歌本文の全面的な改訂という展開に注目すれば、それは極めて学問的な色合いをもつといえる。つまり、古本系から改訂本系への成長は、中世的文化の進展させた定家尊重の思想を背景に、小鏡類が学問的色彩を帯びていった展開とも考えられるのである。その展開の方向性は広大本「木芙蓉」の校訂営為がもつ方向性と類同する。

広大本「木芙蓉」は、未だ、源氏物語原典からの引用歌本文に青表紙本系統本文による改訂を受けていない。紅梅文庫旧蔵本に比しても、「木芙蓉」そのものは、かなり古い小鏡の様相を伝えているものと考えられる。しかしながら、内閣文庫本「木芙蓉」との比較をとおしてみた

広大本「木芙蓉」は、その校訂當為の中に、古本系小鏡が改訂本系小鏡へと成長してゆく方向性に類同するあり方を認めることができる。この書写・校訂當為がいついかなる人物によってなされたものであるか、尚検討を必要とする故、軽々なる判断は避けたいが、小鏡の成長展開を導くあり様として類同性を考へうる可能性も残されている。広大本「木芙蓉」の存在の意味は、存外大きいものといえるかも知れない。

以上、広島大学国語学国文学研究室蔵「木芙蓉」について略述した。平安文学資料稿「解説」の補足として記したが、なお説明不足の点もあり、又、内容にかかわる点にふれるべき問題（源氏寄合、等）を残している。それらは、先学の諸論考に詳しく説かれており、御参照いただきたく願います次第である。

（付 記）

本稿擱筆後、伊井春樹氏が『源氏物語注釈史の研究』（桜楓社、昭和55年11月刊）をおまとめになった。源氏小鏡についても一章をさかれ、その成立・伝本・性格にわたる問題は勿論、源氏寄合等にも詳細なご検討を加えておられる。本稿で利用させていただくことはできなかったが、是非ともご参看いただきたく願いますと共に、非礼をお詫びしたい。尚、同書で伊井氏は、高井家本「源氏小鏡」を改訂本系小鏡の第三類に分類所属させておられる。本稿では、高井家本が「木芙蓉」に近く、引用歌数も百九首を数え、引用歌本文にも「木芙蓉」の異文とほぼ同じ異文が見られるので、便宜上、高井家本を古本系小鏡の類の資料として用いた。小鏡類諸伝本の分類としては伊井氏のご判断に従うべきかと思う。御教示・御批正を仰ぎたく願ひし、しばらくこのままに措くこととする。